近世・近代社会経済資料（古文書）デジタルアーカイブについて

（１）　このデジタルアーカイブは、東京大学経済学図書館が所蔵する近世・近代社会経済資料のうち、古文書類について順次デジタル化をすすめているものです。

（２）　このデジタルアーカイブの利用に際しては「東京大学経済学図書館電子資料利用規則」に同意したものとみなされます。

（３）　印刷物など他媒体への使用については、東京大学経済学図書館までお問合せください。

（４）　画像は白黒です。文書原本の朱書や裏書、端裏書、裏継目印、前欠・中欠・後欠の部分、丁間に挿入された文書や脱落した付箋については、画像内に「朱書」「裏書」「端裏書」「裏継目印」「前欠」「中欠」「後欠」「挿入文書」「脱落付箋」などの置き札を写し込んであります。また、原本が破損し撮影が不可能な場合や、白紙が何枚も続く場合には、「以下破損につき撮影不能」、「以下〇丁白紙につき撮影省略」などのターゲットで明示してあります。

（５）　画像の撮影には文字が視認できるよう十分な注意を払っていますが、資料の欠損、変色、褪色等の劣化や、ノド部分の状態によっては、原本の文字が全て写っていないものがあります。これらについては資料の原形を保ちつつ、出来る限りの範囲で撮影したものとして了解下さい。写りの悪い文書については、東京大学経済学部資料室にて、所定の手続きにより原本の閲覧をお願いします。

（６）　文字間のコントラストの差が大きなものについては、視認性を高めるために、照明を調整して複数回撮影しています。この場合は、同一の丁の画像が複数枚連続して表示されます。

（７）　本アーカイブに関する質問等については、東京大学経済学部資料室までお問い合わせ下さい。

（８）　本デジタルアーカイブの一部は、独立行政法人日本学術振興会平成 25 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）課題番号 258061 の交付を受けて作成しています。

環海異聞

二

經濟學部研究室
80
507

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677382

島人男女女女ノ圖

東京帝國大學經濟學部研究室之印

經濟學部研究室
80

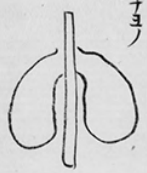
東京帝國大學附屬圖書館
經
22712
大正十四年登記

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677382

額上頭圍に
とめる冠物の圖

木を刪りて作り
漢橋に出る時用ゆ
沛老ゆ作り

鳥の婦人異様に穴を穿ち小木を横まさし
連環を無きさけたり全圖并耳悔数孔
をうかり目らしかに形したる全圖



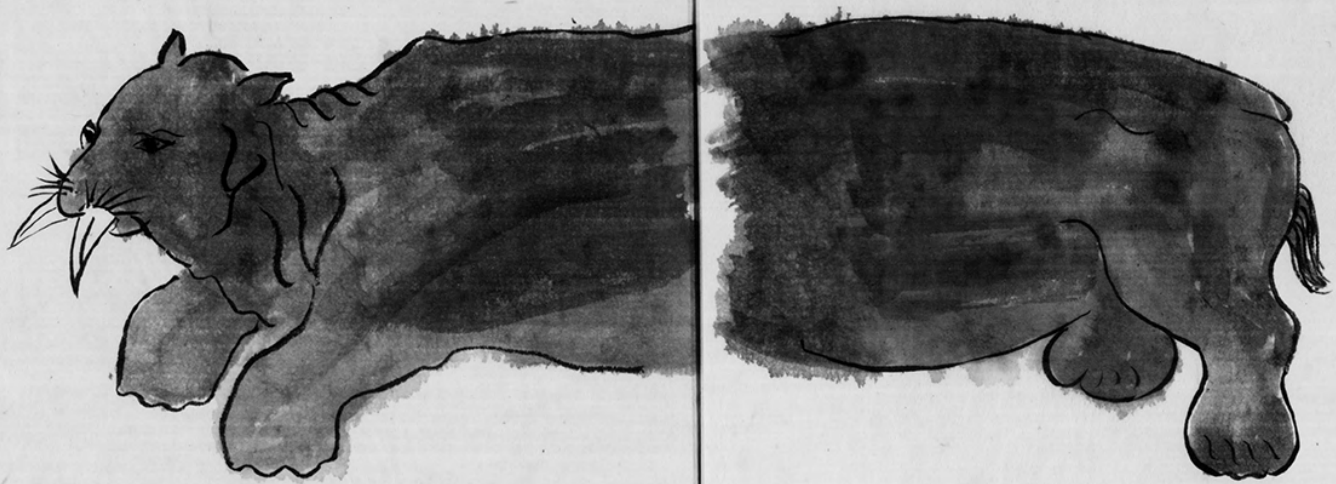
オクチヨノ
角

衣服の縫目両側に
オクチヨの角を縫付
たる圖

ツムノ圖

セイウチノ牙にて作る儀平持来れる写真

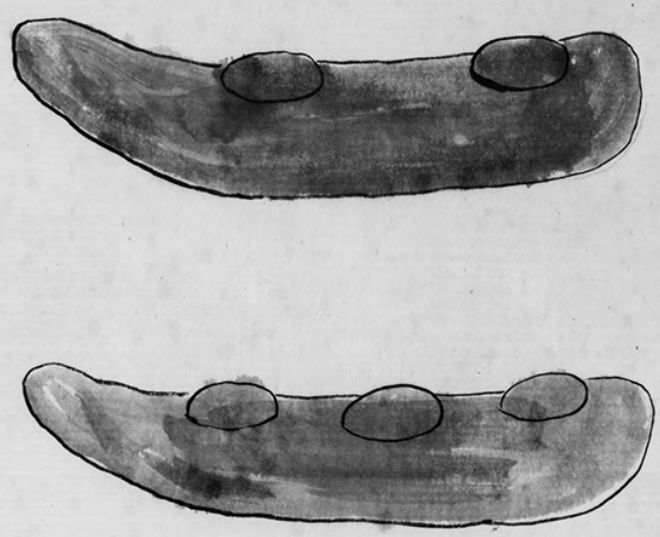
セイウテノ圖



東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677382

皮毛全圖

四人ニ成リ
三人ニ成リ
二ツ称ナリ



紀州ニ於テ鰒(シヾガヒ)ニ於テ海狹の鰒ヲ似タレ鰒ハ年度ヲ以テ落
シ其ハ其ヲ以テ取ル法ニ於テ其ヲ見ルヲ以テ此鰒ヲ取
清ヘ其ヲ以テ鰒ヲ人清ヘ其ハ自然ニ於テ其ヲ是ヲ推又
鰒ヲ以テ其殺ヲ以テ行リ圖ニ於テ

横ニ和蒙古ニ於テ海の鰒セーハールト セイカルフ と云ヒ
是ニ於テ此セイウナカと思ヒ居ルナリ

一 舟ニ之の名ハ エストウスイワノイテガラロウ とヲ以テ ロテロウハ苗字
ナリ彼國の人思ヒテ苗字を指ニ付タレ其ニ於テ苗
字を称シタレ其ハ昂此人の毛ニ於テ此の所ニ於テ描ケ
ヲ人も此此カラロウ ヲ以テ居ルナリ

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677382

一 此島本國の事今は後島と云て云て海獣の皮鞋を
立の為に鞋をきし役人諸居ると云へ申し

一 島人の首長（ヲサ）ともてはしきのもおほへて生活居の出家へ入り
て見ふ者のきの居ゆゑ事ハいふて居て板家にて
天井なとおもつて出て扨本國の市主より給りゆゑて紙往
海の方腹に金銀の面のわりこゝ面を秘密しけり是を
志腹いさせしも見れ給分のまゝ平人とハ煙竹百束（おの所字）
なれハ此首長ハ銀百束なふるといふ事とのゝ此おさ
斗にて此島人の所（シヤ）し百分の故オロシイア本國より御貢
玉綱にて所役となる人を交代詰させてさし金鞋なり

一 庭中樹々沖ハヲシキ上ゆゑ甲子ルハ海鈴ホロウ獵弟おの
沖を用ゆ姫山の中ハ麻濡伴なとの吉日を門裂用ひけり

一 夜ハ明る時ハ主家の所列せり朝ハ早く起獵ゆゑけり

一 此島別る室風烈しき所ハ途中にて吹閉さるゝ所に
有し沖来なんきなるゝ事

一 食物鰒鱚鱒おの魚類なり日ゝ給けり

一 一七日にまゝ有ゞしあさかしヲシキの沖にて大麦の粉を焼り
黄つけ沸にて塩を入金あをかへてゆゑ仕るものを
振舞けり島人ハ皮をよけいこ其家の所にて裏
ゆゑのゆゑふ是を作へけり

一 多く生ひし蓬の如き草を焼て灰にし煙草に混ぜ置
病人病より悩みける時其手掌へ一撮みとりて其人
其を吹てさらに悩みて其を鼻へあてかみ嗅
のみ寺へ入て煙草の気を吸ふ間に合すなる
一 此国にては漬合あり
一 婦人産後の三日より七日まで毎夜産後神生の児
を膝の上に抱きつゝ添ひて臥し抱きて一所に抱
れてのちを行ひせる足にて出るもの名の流れ
毎夜にもかゝる其間をも為るもの居るなれは
其夜を満ぬ迄流れたる毎夜(浸衣)たびの湯をなるとの
その夜まて二三日浸け置て後浸衣にて流し捨
捨てきれいにして後髪を洗ふなり
一 此地の人数多人一所に住居なり一年中に毎日西東人
八尺干程の居所に大口しイヤ人居宅の間に紙をかけし
一 此国の行かり過て麻にて織りし物にして包み会
汁を得て煙草を木に載せ置くもあり
一 此国の人は黒き蝋燭をもて灯しかるの向ひ居れ
一 此国の三月頃にて日アカク月トケタ水タカ此三月頃より
は アレシヤ 御国の振合も
明る乙卯の春の来る頃に至りイツノイナカラ口立より入

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677382

平日魚類だかり続くゆゑに居てはおのし身ゆゑも何し
うゝ無くしは二年ばしまして本國へ交代所へ連渡可
申ましまして出立の用意の仕相志ともすれ人上草の高股
何くへ申し則世話志用仕何も志の為に無從日月之日
とゝえゆ此為出帆仕し

一 此為に漂流せしは寅の六月まて高邦の日月と十ヶ月
ゆゑ申し

一 五月に彼類を捜に積欠て程お集りしゆゑまて彼後
帆にし此為の後帆一年を出し是は漂流人つゝ
流りしゆゑ出立と取り申し

綜全圖

綜をきふ
手法の器

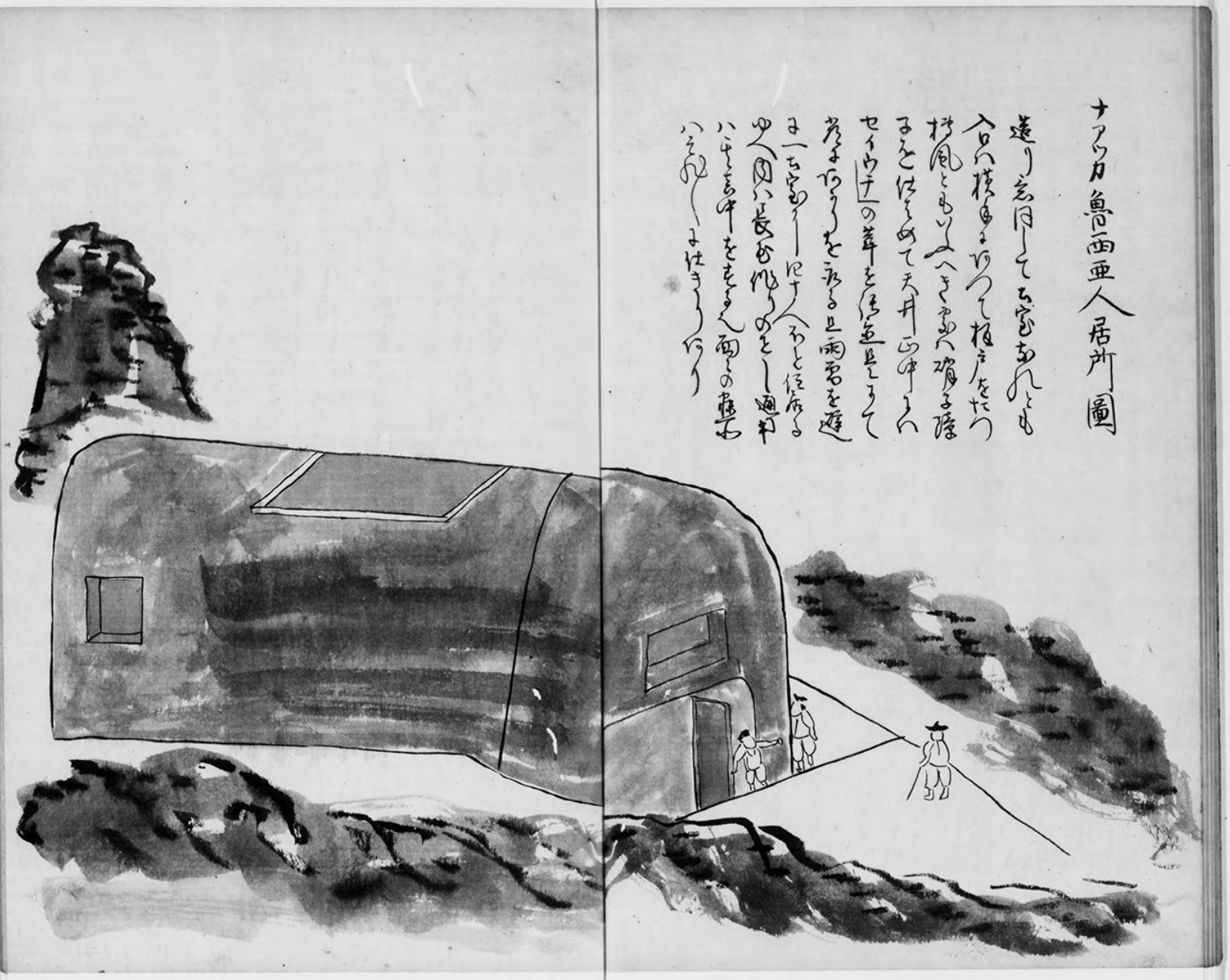
綜の出をうける
小板行り是を
穿此孔に右の小
板をさし出てその
小板を又指さて
うくく掛りたる
評定の前を持て
擲をしへし

ひまてかふ海
皮衣全器

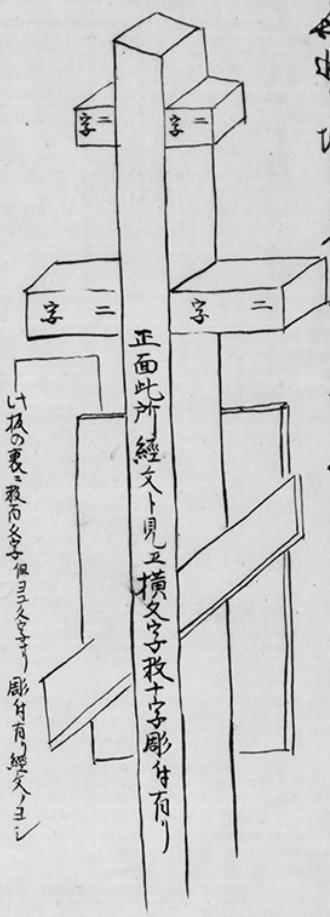
東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677382

ナアツカ魯西亜人居所圖

造り忘日して古宮なれとも
入口は横目に向つて板戸をたつ
横風ともいふへきなれは猶子孫
子を仕ふめて天井正中にハ
セイウチ」の葦を仕立是にて
茂に向うしを取る且雨雪を遊
ほ一古宮にして八十人ほと住居る
ゆへ内は長む仕りのをし通り
ハ十三畳中をもてる人面この蘇
ハそれしに仕きりなり



東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677382



此角柱にて作りしとの事の中に立て此柱に横文字彫付此柱に
何とかしるやお恩何との事に立て立ちや所に字種にかりあるとの
事や近く地方に入れ候へなし所にて此柱立て此柱に

此地に流し其間人住居流し其何事の地にも建
立て殺ちのこれ

一 日本の宮殿三年 辛亥年より此年に至る四年
間と存し

一 カラロウ 歳六十に近くおもへ申し荒れハケライ辺といふ事の
よし書も連流り申し其間中子を人出生のよし書の年
十七ヶと承申し

右イロノイチカラロウ事柱者を地方に連流し始末宜く
此柱にて右勤功に安り商賈の事なるものにて
られ上より技持方も給りしと云其間中者人
中国より割合出すこの柱に承り申し
柱者ともは安ヘトルフルカの頃出立陸帆の節もカラロウ

一 ふくサンハシヨウ」よりハ狭き事なとおこへ申候此事なのも彼頼
鞠しく積夫々相考其此事なへも上陸ふ仕
一 此事之の間小島ゐつて多し海上草船の往来ゐて
此事ゝ先年勢力光吉丈ホ漂ゑ仕候遂ゝ取り申候ナア
ツ方」より此事之ゝ東海り「ヨロシイア」里数まて九百里程
と申候 併此事ハナアツ方」より「サンハシヨウ」へ出り此事之ゝ角
形ゐ取りゆゑ ゆゑ是之の里数何れとも也取り申候
一 アミセイツ方」より「カミシヤツ方」と申 地方の湊ゝハ海上千四百里と
取り申候

カミシヤツ方」ハ陸地東北と何る湊なり

此事又二日ゐと追留見るゆゑ海出帆して
六月廿八日オホーツ方」と申 大湊ゝ見ゆ
一 此事又魯西亜ゐ本国より地続まて南の端のよし 本国の地
方への入口のみなとなり
一 アミセイツ方」より此湊ゝの里数取り申候 終し四十余日
ゐとゐて見仕
一 ナアツ方」より「オホーツ方」へ東海り海上彼里数三千四百里
と取り申候 サンハシヨウ」アミヒイツ方」南北ゝ立ち此湊ゝ
の故凡四千里も何る人きのとゝ存候
楊ふ南の極出地六十度前後の地より海氷北り七

十度余南に極下に近ければ老て氷りて解ぬ無地
國に是を氷海の邦と云極寒の候にいたれるなり
其氷の上に雪積り又氷り又積る物に重ねて
山をなす是氷山なり 卧兒狼徳亜（シルンーランド）（アイスランド）東
國なり其の地に氷海にして漸く極下に近く氷山所
らたる（猶和の儀を行れば 物動が設けると云）和蘭の人にて其海に鯨漁にし
毎を出る其所境を是状とするものなり此度漂人に
物語ありしの状これとありひ到られたり（又南アメリカ 阿高山と譯）
せるゆゑの岬の海上を出りし時も危ふして南極下せす度の海にて
和蘭の山人として亦此たちにうきさまきしの事條に記せり
依て今新に和蘭表写せる圖より此像して其

果を製し寄に所せり我漂客に婦しきまてかゝる
事ゆゑ有りしは古今の事の殊に異なる人きものなり

唐和都蛤（ヲホーツカ）

一

寛政七年て卯六月廿八日オホーツカ（ヲホーツカ）と申漢に志度ゆゑ
本船の毎年より松前にのるを不速役所におとけ引候
ゆゑ日本より長崎の船にて町役人佐の宅とかへ表
口六日余奥行八九間ほどの間は板敷にて鰹を粉さへ
並べ事なく同毎年の人にて一事なるさし並ゆゑ食るものは
麦の粉を餅のごとくしらへたるものなり人給へさせゆゑ

麦餅の事

一 此ゆゑ「ヨロシイア」の地にて入口の溪にて是より本国都府迄も地續にて此度く東北にて大河の海に流るし川溪なり此地より小の方に大流至の川にしを来る様に彩溪のよし取りかひ

一 役不出在高都より麦餅を拾ひ事を給ふ

一 ナアツ辺より此溪を大凡彼里数にて三千八百七十里有と船を高くアミセイツ辺より八来申まで申酉とをしり かひカミシヤーツ辺とか溪の岬をハ太ふんて此ゆゑ高麗に

一 高麗の節ハ高麗の積位の船高麗の腹繋ぎ成りかひ

一 此溪ハ小海中の不能を付く高麗又小アメリ辺の法国も此ゆゑより船を付出しにより

一 日本照夷諸島の内コレイツケ辺とか高麗近年麦の種と年家の類を此溪より流よし取りかひ此コレイツケ辺ハカミシヤーツ辺とか溪より つまく高麗の第十八国に高るよし此島の狼荒いくつて上来にて他在の猟所使ハ價一結付て相ふ取りかひ

梅ふ島更照夷ウルツフ島の内なるへしウルツブ松前にて猟布島と云

又掛ふ行勢光を又おを先年護送して来りし
而も此湊より仕出し子モ口ハ志し追て相来
へ来りしとゆへり二月御光を又ハ源志の為を
出てカミシヤ四辺といふ湊ハ送ふ也地ふ之人なし

一 石炭矢数挺居也し湊の左右に五一方に七八挺一方
ハ砂場の上に三四挺ありて寺の前に二十挺余すへおくいつ
ても車仕かけの三尾にのせ此度長サ七尺だかり口径り
二尺四寸ゆ出て

一 寺ハ三ヶ所ゆ出て 寺のうちハ
[illegible]

一 屋造りハ横に丸を取をかさ[illegible]て組かけたる家之房根にハ
板をまきゆ 有図

一 此地ハ居ると居ハ高より暖なる方にて此節ハ四本の二月ハの
三年ハと云へり此五の間ハ綿入袷に単物ハ八月に
入ハ此ハ雪降りハ十二月の頃ハ海の氷も厚く氷り川に
ハ前編一面に氷りハ右の頃ハカミシヤ四辺より湊て千里
旅の海上も厚く氷り張詰ゆへ車(ソリ)にて拵夫を積こ
大に動かせ往来仕

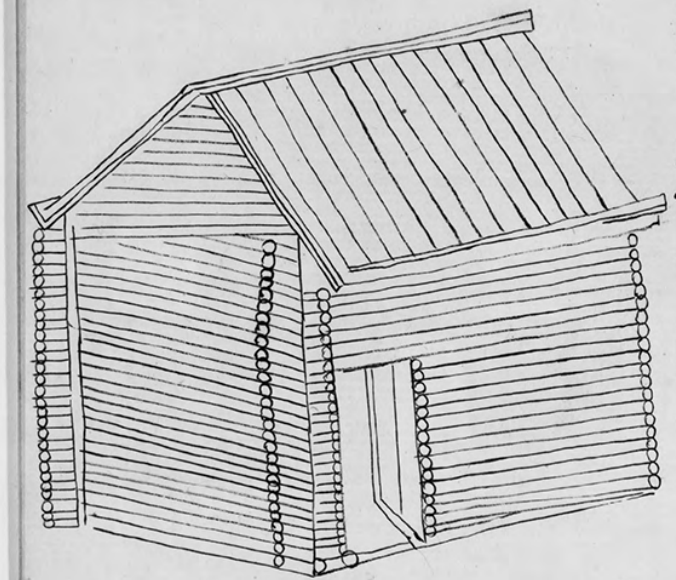
一 此地ハ雪無所居て大を当らせひ申し 図左行り

一 此地ハ雪無所居て積て此地ゆへ当ら雪を取ひ薪の
の類何にても積あるいたり人ハ海陸とも此数尺の

あるひくせゆひ生ゆのまひ方よくあしたるものゝ仕人湯
技のやきものをもつて是を振り日筆を使ホロウ姉とゝいへ
右の方へ行ライりと姉とゝいへてたるけヒりて姉とゝいへバ
重すくふけゝ唯ゆけといふ事をシトハ江といふ湯技を
地ゑてあらせへ是をとらむ右荷の煙き重きにまゝ
うひ物ゝ多少行つてあらする是物四の時より着く
出さ候高ひたて家の内ゝのこつあきあてあらる候
育て暮へ生魚を干魚をも有しむ是ハ此地ゝ多を持せし
とのこも見ます左年
物ゆゑ有り　但しカミシヤーツ辺日根ありといふ
揚るふ止白里の小さて堀沼海の地も代物をまゝ

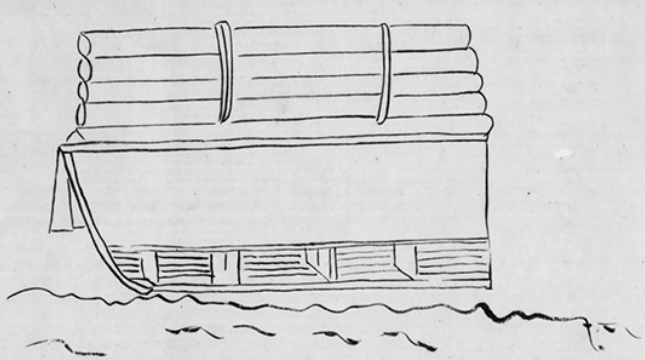
の曷院和菓源する無地の書を図にり

才木ーツ力面飛り
横ゝ丸太木をゝ絲
組付けゝる家あり
凡根の板を用ゆ



アウクメンヨリ以西
人家ハ家図
窓ハ氷の板を
仕入れるなり

大きい荷を積こゝる
高車高軍の図
カミシヤー沿うても
はゆらられをゆゆ



東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677382

一 土地にてるあきゆへヤコツ[illegible]とよぶより唯今仮に[illegible]ヤコト
[illegible]の方へ人の往来物を持通のくめあり彼地より出る人
人を[illegible]せ来たりまたくものを持通り来りしてるを[illegible]
[illegible]通りてるまて此方分用を仮しよい

一 ヤコト[illegible]前後の人との恵名をヤコーラ[illegible]とよい則此事なも
ヤコーラ[illegible]もませりに居く

一 滞留中食料は右とよい ケレフといふ洋にイルマトツ[illegible]の[illegible]有 并に午間又は夏
間を考へるものも居へ給ませよい

一 此事なまて日本米三袋アルヽけよい日本より渡りしよし
よい後も[illegible]の日本後にて此生く

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677382

一 八月十八日相考とも居ゆるく役人参り此地出立ゆるす仕
形渡りしに惣人数一同にハ不知ゆ様にて十五人国元渡し
渡手吉田辰蔵之人お為り十八日農民に付て代官交代の
席とおろへ并ゆ様にて役人生渡人数廿人だけ出来
上人の者もてるに無ゆ也テ川ヤコー辺とゆるく登る様にて
一 本相様人のものへ渡ゆ様りしに惣人数ハ退とに返りぬ也
イトふまとに出来ゆ此為ハ代官先立参りしに
一 是より先の居中にて上にてあるへ毎年ふ本如安行立と
ゆるへ出来ふしてるへヤコー辺のヤコテ辺つゝひしにヤコー辺
もてるに無ゆり日程なしふ仕来仕て其先に三人無ゆ候てる

の日につなきて渡ゆ志てうひ参りしに何丈も右のまゝに出来ひ
多く籠別してのるゝ出来ひ
一 てるへ居中夏なれハ青物を居て給ひしにハ已ゆるに
雪を頼て拓物をうつけて給ひしに飼料とてハ持来
ふ仕て
一 波間のてるへ二十の時畢むを云ひしに伏てるのるハ無
にいくしへハ格別丈夫にて居もよく渡し物ふ
ゆ中供し又馬に渡し升へきん切無出来ゆ者の事なる
高ひ無ひし
一 居中ハ荷物并食物来てるにつけ参りしに此事なり十四里

一 [illegible]

一 [illegible]

[illegible]

旅行用意せし人の号

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677382

セリロチカ圖

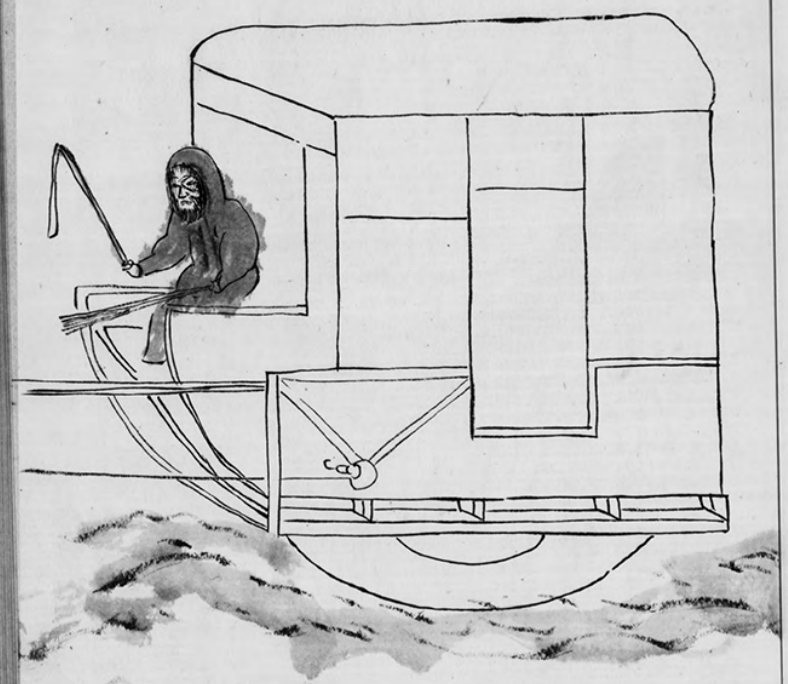
荷を蓋に結ひめを掛にあしらる圖

鬼を荷をの細に施せる物に付けて持するん細に思ひ ほそくなりたる度あり

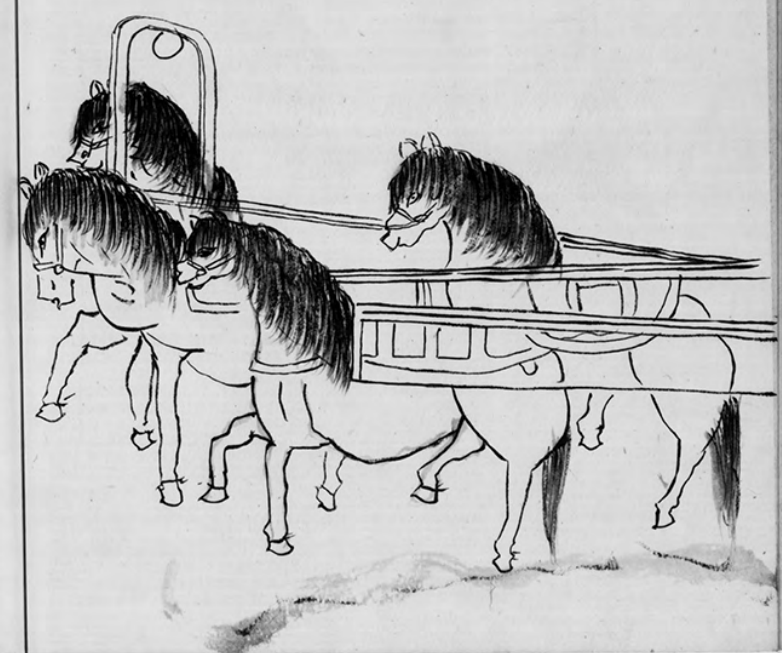
馬に荷を結ひたる圖

人を乗せてる車を見たのるまで河水のうへをひらせる器

舊車の前に腰をかけたる人をてる姫(マゴ)あり後細をつけたる鞭のかきこのをもつてる見をすむ



東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677382



東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677382

一 家の明りは窓より取りたれば何うり陰子のこゝろにあるを
用ひ事なれば是は雪水を川より窓形に切ぬきまして
右の窓の口へ結ひ出りの透るのまゝに雪をつめ出し
あをうけ此ゆゑに陰へは勿手水り付ひ内は雪のか
何うくれば是もしかり雪ふきこうけまぐこゝも無り
ひ前は是を掛ひふきへは始めよりもまゐし何うく
おゆひ

一 此道の女又何り婦人を聟をゑる組まし陰へ下ケて
こしろより雪をまけて家へ結ひ出ひ娘子はゑる組
まして下ケんまてなり思して女子の寄りものは陰陽天

鵞織ニ於て毛織物の所まてくり所ゆは形のまくまし
いろ〳〵業躍いろして志ひ縁りまは糒尾いしかり
鵞の皮を用ゆ毛の方をあへ陰

一 柳は雨蓋門搭まて午角まゝセイウチ船の所まてまつ
くりひ平日さしひさぬ根のこゝ付て此道の女人を異ハ
ふ仕

恵哥都蛤（ヤユーヅカ）

一 十月十三日ヤユーヅカとゆ志志オホーヅカとゆ此事なと
ニ於柳三十日見結まて志の積り出立のまゝ嚴ニ之の所故
乃後迄まゝおゆ五十日暇まて志仕し此事なる教化二千年

と申極寒ニ候へ共又ケケ辺とて此地寒く候得共是ハオリヨシ
辺の者ハ寒暖ニ二ケ年何れも寒さ凌ひ候得共
ハイルチー辺の方西風ニ吹き候
一 冬中ハ陸地より吹来り寒風ニ吹当り候ハ注意
の者迄も寒さ耐兼候へ共ハ寒天付候へ
一 冬中イルユー辺までも海川つき川をし候ても
此節ハ寒気つよく候故海の面も凍て歩行セ氷の上
を歩行して行しに其外犬ニ而馬くへがんせき一面なり
大木の根を見ては先キの方へ開きて
平らなる所ハ冬中ハ凍り候ハ歩行の路も

凡丈計り上陸候て又川の中ほど迄より氷凍りて岳の如く
有りて海中より引き凍て吹つけ土地へ積る也
積地も才木一辺よりヤテー辺迄の冬中より格別寒く凍て
寒さ先ハ一晩をつけ立ちて寒の駄にて陸する
を見付けて直ちに上陸仕候
一 冬中寒ニ而も有之候へ共寒さともおんぶ寒く
雪ふり積り候へ共ハ寒候ハ才木一辺四五の後ハ十日
右ともえて寒さ凌ぎ候
一 右ニ而も通の根の木ハ寒く凍て根の木ハ折しも寒候
わ寒さて候へ共て候得ハ

御本紀せるかくしたる人のとの才本一ツ辺を三度に
發見すれハ儀平木第一書立てあ篇の後中
紀なり左平第二書立清太史云て第三書立
両人同後ハ如くしても其の後中四人列候
其の様子ゆゑ以後を云迫

出立の順

寛政七年乙卯八月十八日
才本一ツ辺出立翌八年丙辰
二月廿日イルユーツ辺へ出

儀平
若衣
辰秀

寛政八丙辰五月上旬
才本一ツ辺出立同年十月
イルユーツ辺へ出

左右史
銀三郎
藤三郎
左平
右十郎

同年十月三日才本
ツ辺出立同十二月下旬
イルユーツ辺へ出

清太史
清秀
己之助
吉郎三郎
市太郎
八三郎
武之助
翌一ツ辺にて
高年遠留

一 清太史ハ才本一ツ辺出立ニ命ハ才口シア人ニ永科一人ニ

一 蝦夷中痘瘡を以甚て病為ハ此を扱て山中ハ出すハ毒の内ニ入
て居る間も寒暑雨之毒ハ此ニ付て尽入るのを見て節の如く積てある
セイチカ器を拵ヘ其て以為ハ此 ヤエウカ迄 那ども以て入るもの皆此ものを守り
其ハ蝦人里ニハ居らずハ

セイチカノ圖

蝦をとめおく
かやうのもの也

一 七月頃の夷中痘瘡の八九月頃の気候ニて悉ハ
一 イルユーツカ迄遣置候中ニ市之助 儀蔵 庄蔵の病ニ相成候ニ付
殺商師を走し療治いたし候得ハ乃薬を以て欧又共ニ
の実のとをしとのを治せし所 梅の子 刻み 営実（イバラのミ） 返し候て
其ハ病院ニ而大勢薬用の致し相共ニも気ニてアムア
此やらめく病人二三十人も相居ハ何連もの出ると河三蔵
此人此やらて遣置居候て此ハ其まゝハ出生不申候由
まて病死仕候よし
一 去年ハ夷中の内イルユーツカ迄と七百里も出候候とハ申
オスエス迄とハ以て国中ニて十万石程の地続キと申

井戸とも手水鉢のうち車井戸ハ水ハ清く冷ニて茶ニ用ひ候ニ
ハ勝候へ共水汲ニ手間取候ニ付ハ水ハ悪候へ共手近の
ものを用ひ候ハ勿論ニ候

一　伊木歌仲哈

一　寛政八丙辰四月末の便ニ拝啓仕候ニ御手紙
忝拝見仕候ニ付御返事申上候ニ付ハ御用の
ものハ御座候ハヽ御申越可被下候ニ付ハ
別ニ申上候事ハ無御座候ニ付ハ御用ハ
無御座候

一　寛政八丙辰四月末の便ニ拝啓仕候ニ御手紙
忝拝見仕候ニ付御返事申上候ニ付ハ御用の
ものハ御座候ハヽ御申越可被下候ニ付ハ
別ニ申上候事ハ無御座候ニ付ハ御用ハ
無御座候

一　寛政八丙辰四月末の便ニ拝啓仕候ニ御手紙
忝拝見仕候ニ付御返事申上候ニ付ハ御用の
ものハ御座候ハヽ御申越可被下候ニ付ハ
別ニ申上候事ハ無御座候ニ付ハ御用ハ
無御座候

一　寛政八丙辰四月末の便ニ拝啓仕候ニ御手紙
忝拝見仕候ニ付御返事申上候ニ付ハ御用の
ものハ御座候ハヽ御申越可被下候ニ付ハ
別ニ申上候事ハ無御座候ニ付ハ御用ハ
無御座候

一　寛政八丙辰四月末の便ニ拝啓仕候ニ御手紙
忝拝見仕候ニ付御返事申上候ニ付ハ御用の
ものハ御座候ハヽ御申越可被下候ニ付ハ
別ニ申上候事ハ無御座候ニ付ハ御用ハ
無御座候

一　寛政八丙辰四月末の便ニ拝啓仕候ニ御手紙
忝拝見仕候ニ付御返事申上候ニ付ハ御用の
ものハ御座候ハヽ御申越可被下候ニ付ハ
別ニ申上候事ハ無御座候ニ付ハ御用ハ
無御座候

一　寛政八丙辰四月末の便ニ拝啓仕候ニ御手紙
忝拝見仕候ニ付御返事申上候ニ付ハ御用の
ものハ御座候ハヽ御申越可被下候ニ付ハ
別ニ申上候事ハ無御座候ニ付ハ御用ハ
無御座候

一　寛政八丙辰四月末の便ニ拝啓仕候ニ御手紙
忝拝見仕候ニ付御返事申上候ニ付ハ御用の
ものハ御座候ハヽ御申越可被下候ニ付ハ
別ニ申上候事ハ無御座候ニ付ハ御用ハ
無御座候

一　寛政八丙辰四月末の便ニ拝啓仕候ニ御手紙
忝拝見仕候ニ付御返事申上候ニ付ハ御用の
ものハ御座候ハヽ御申越可被下候ニ付ハ
別ニ申上候事ハ無御座候ニ付ハ御用ハ
無御座候

一　寛政八丙辰四月末の便ニ拝啓仕候ニ御手紙
忝拝見仕候ニ付御返事申上候ニ付ハ御用の
ものハ御座候ハヽ御申越可被下候ニ付ハ
別ニ申上候事ハ無御座候ニ付ハ御用ハ
無御座候

一　寛政八丙辰四月末の便ニ拝啓仕候ニ御手紙
忝拝見仕候ニ付御返事申上候ニ付ハ御用の
ものハ御座候ハヽ御申越可被下候ニ付ハ
別ニ申上候事ハ無御座候ニ付ハ御用ハ
無御座候

一　寛政八丙辰四月末の便ニ拝啓仕候ニ御手紙
忝拝見仕候ニ付御返事申上候ニ付ハ御用の
ものハ御座候ハヽ御申越可被下候ニ付ハ
別ニ申上候事ハ無御座候ニ付ハ御用ハ
無御座候

一　寛政八丙辰四月末の便ニ拝啓仕候ニ御手紙
忝拝見仕候ニ付御返事申上候ニ付ハ御用の
ものハ御座候ハヽ御申越可被下候ニ付ハ
別ニ申上候事ハ無御座候ニ付ハ御用ハ
無御座候

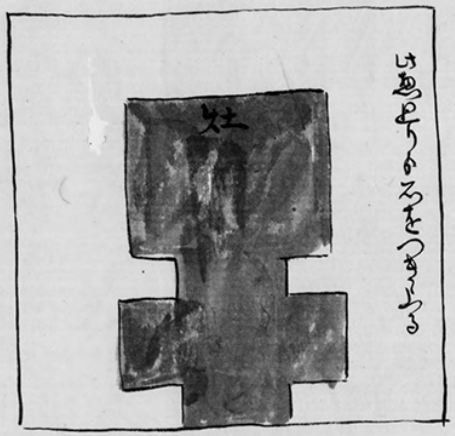
一　寛政八丙辰四月末の便ニ拝啓仕候ニ御手紙
忝拝見仕候ニ付御返事申上候ニ付ハ御用の
ものハ御座候ハヽ御申越可被下候ニ付ハ
別ニ申上候事ハ無御座候ニ付ハ御用ハ
無御座候

一　寛政八丙辰四月末の便ニ拝啓仕候ニ御手紙
忝拝見仕候ニ付御返事申上候ニ付ハ御用の
ものハ御座候ハヽ御申越可被下候ニ付ハ
別ニ申上候事ハ無御座候ニ付ハ御用ハ
無御座候

一　寛政八丙辰四月末の便ニ拝啓仕候ニ御手紙
忝拝見仕候ニ付御返事申上候ニ付ハ御用の
ものハ御座候ハヽ御申越可被下候ニ付ハ
別ニ申上候事ハ無御座候ニ付ハ御用ハ
無御座候

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677382

ヘイチの地



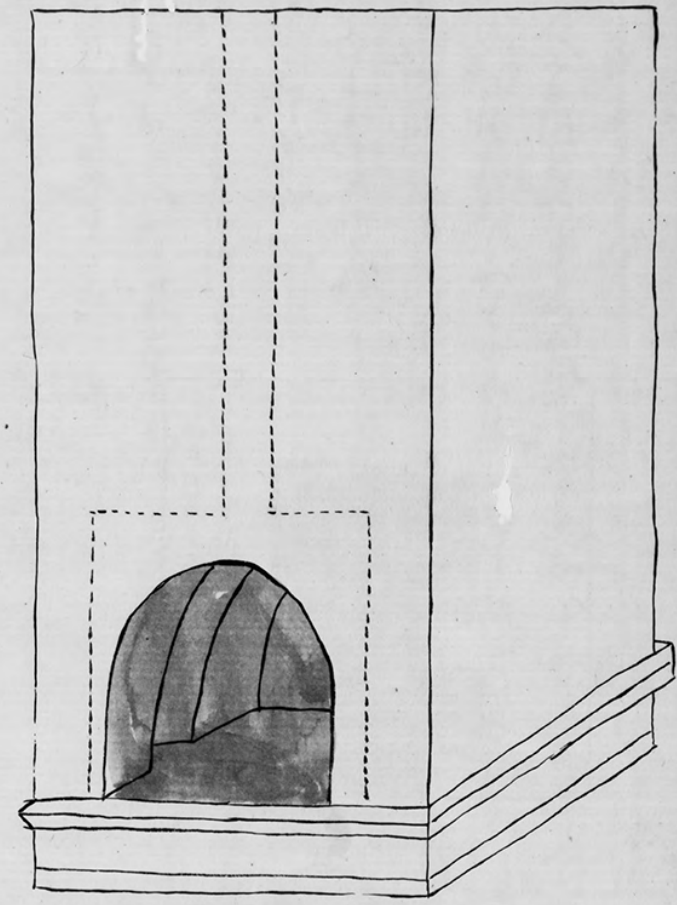
はしりかゝるをつきふる

それ平田産業にみちて雑のれ温暖になる人はこの地
室田の人家内をかゝしめ家中喰気なかしむる為にかけ
たることの人産業無にかくのおとくなす故に家の内家に
喰まて絶縁つ移るなつて弱くは業なとなし居る五穀に
無くのみに遂つけぬ事にしめ人目くらめき気とわく
成人地しかりき

一 家の内ハ男女ともに持子にかゝりて居る人故に産業の内
松の持子なく無りむ客様も五つし食ひする所を
も大小いなしあり

一 上の間こゝきゆゑに佛の一遍額無なく有

ベイチ
全圖

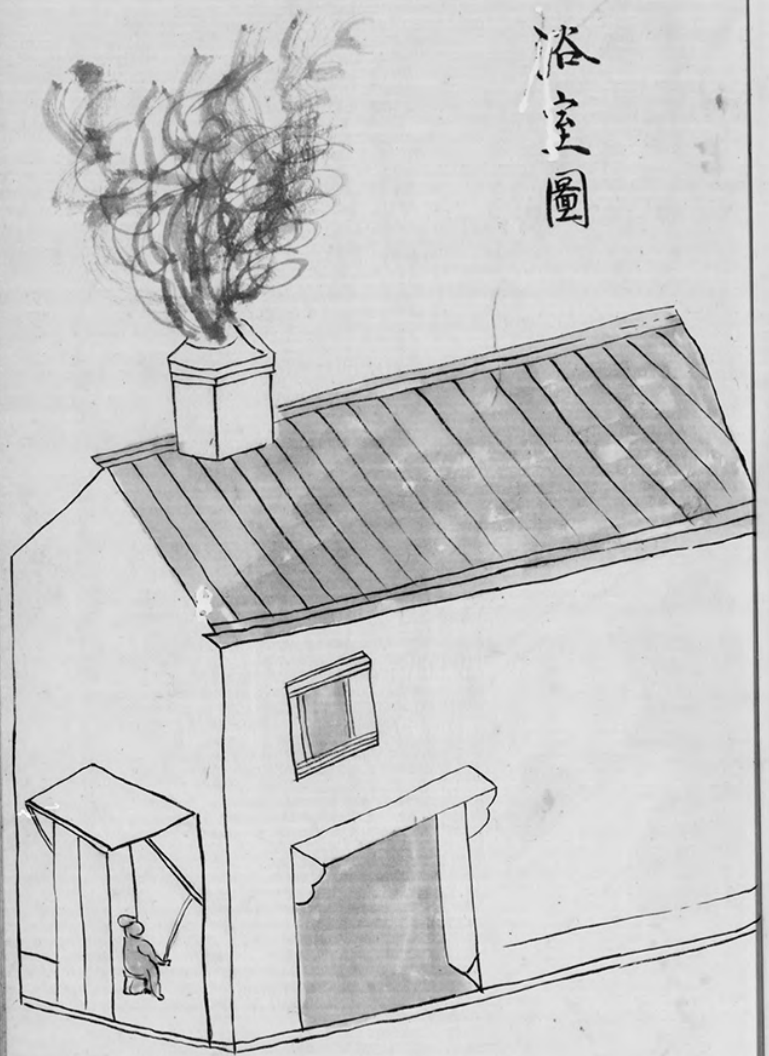


一 圓房ハ落なるものゝ如ク細葉を無數とりつめて
何り前の方ハ腰簾をかけ入ゆゑ也しかして何ゝ入樣及ひ
いかしたりなめし皮の面安何り表裏面の内へ入る
のもを入るいくつてかくらかなるものゝ是表ふさんなり
桃も右のさくしとものゝ如くしたる内ハ是いく所も如き面
とする人上より見る物もふとんに似たる物なり是ハ為
の物にて作りて精粉を面しまゝ

一 所も二階にかりし片落にかゝふ内の長板のまん中にしかけ
穴をかけ後の穴の物に瓦を落ち生ケ用を使す上よりかる
交け筒何り下の溷に落ち来る落つれハ溷(セチキ)より流るゝ

一 土地にて新作のまゆしにつゝみ云こゝあまきゆへすこゝ次第
ます但し稲氣をさけるとて涸爲く石所をかり掛るゝ
倉庫は石造りし家の作りあと於前にもこゝあし但
戸前まと失まとするといふことなり家の内は穴前を
しあれは金銀は物を貯ゆる爲まもふく是あれは何をも
其夜は涼しきゆへ其の痛まれとの夏家にても所
小き穴前何し夏の内閉鎖まて野夏の鎖其内貯ふ
間清涼なるゆへ其の接破(ソン)するゆ所し夏も川ハ
解鎖りの水何り故に穴前へ入ても腐敗心を所し
と思ふ所は右の水を川より二丈有り其穴前のめくりふ

積此冷物をもつて水を囲むゆへいたむゆ所し
一 井は深く鑿り井うしを生座より上と云ふ上るゝ
水は井桁をもひす水を汲むを通つゝなりちゆ川
あるとて着す
一 風呂は如し風呂にて流しの内に行り但し住居ありと所とて
風呂屋を建て住方内に石を積出て其下より火を焚
て石を焼く能く焚ける時是に冷水を於てきて却
るゝ是にまとりて湯煙盛に立て其内に充滿す此時
風呂屋の入口の戸を閉ゾ毎人への入浴するゆゑは其出
湯まとり相住切まて是を隔つ其懸湯の事なれ



浴室圖

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677382

飯食 第弐

一　近より先ん牧府への中にて八風を解きて粉を出ますよ
ケレフ匕　蒸餾の製法にて寒温の如く麦の粉をとりて和し
練り捏(デツ)して餅となし蒸籠にする　其中蒸籠に入れて捏(デツ)し
かためるもの二三日許し昭八近日を経て味噌にするときは
てるめし特ておかし食ひ織之ふ稍し酸味を生ずるや
此酸き出来るものをもつて数多製造する味は極ケレフ匕
を造らんとするには麦の粉に何れも水をもつて湯をし之を合せ
其内へ許味出来る餅壜を細かに砕きて之と和しかき
まし猶之を温度に適ふの寒暖をして是まで之の気をとらし
かためし其前にて粉とこを播し如く其程ハ捏(デツ)して

餅と成るの気を保ち之脚足をとり餅壜に移る大中ハ自然之
其大小壜を寒竈の間にて置て後を酬ゆる上にて布へ蒸籠に
其之餅の粉をよくして寒竈の間にて上地に積とき並
餅となる温にて其内へ粉を練りてあるものハ乳熟中ともの有
内へ行るべき事等しの中にて入て其くして以てうちの都の
核子を立て温帯とかしたるもの尺のものをなくせきその熟るもの
少をきれいとす掃除をなし其上にて此餅を加へて蒸籠にする
之を行いて熱気消れハ餅の上にてちり集れて又能動風
速に温細なるもし其は大ゐに傷にてより其の風傷々其
大切なるを出さるもの也八月川掃除しかたる気の事に粉をふるそ

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677382

みなふ大熱つよければ粉出けて燃上りて出る所は又合館も粉
のこげてこびつきたる斗なれバ此尾の上ニ隔をあたへるなれ
ならざる事茹餅ニ出来るなり其上に出来る物ハこんちの浪の如
くなり右同人粉のなるを老人一寸四斗り周回へきと云由ニ
製法之此白粉多の食料ニして周る時小刀にて薄く切き
食ふ其そき方ニ切出り小刀ハ薄き物つく事ニ切る
をよし又此法なれさるものハ其細なる薄切出して又甚しまつく
小麦のケンエハ是ハ製法も違せり先麪ニ挽き金小麦の
粉を其内ニ投じ加毎せ梅毒浪の如くかしかへかきたて
至る月の内出して是ハ煙製ニなり湧きこ又是をこうき

出しそれ之を別に粉を塩加へ湧きたつる時加へつけ押延
して除も粗しらなし程よ延し太小麦と切り又懐まつくり
竈の内燃尾の上ニかくへ茹餅ニする之先陣の如し梅此小麦のケ
ンエ是も又凡食するは五日余も見周回中此との老食ニして
熟滞して待ころ之を市中売物ハ平日ともなく待り先んハ小撰
食ふをる物にて見る所

一 午園ハ此地方の老食之（午の糧食をコロエと云 又柱午をハトエと云）到る事ハ午飼しく
炯至市中ニ売物ニ出す候出毎ものハ右ハ其右の石ニ千定候
之午なひ至とくの出し（糯子十枚牛ノの 牧ニ高直也ニ）ニ其老ニ午町ニ入ば二門斗り
て午店ハ売場へ梅午廻りて是を商ふ其ハ大段る翌年

頂よりむかひあたりを槌にて打つ時ハそのまゝに死するなり咽をさ
し通し殺すなりそれより皮を剥て肉を支しそれより又腸
腸をとりて食料となる所の腸ハ別にして排するなり
大小腸(ヒヤシヒロ)ハ肉をとりひきのし能く洗ひ清し其肉に塩(アンバイ)あつけ
其る腸の為に麦をつめこれを腸の口を結び蒸焼にして小切にし
四に盛り客の膳につくる皮ハ和とも実也職人にて取より
よりこれをなめしたる皮にて持りあつかひ皮子に製して靴或ハ
[illegible]の器牛皮にて製する其の多し是牛皮にて[illegible]故
[illegible]し其[illegible]たる肉ハ其の肉にあつかひ[illegible]
[illegible]の[illegible]をなし[illegible]ある人[illegible]なり

見分けて賣なすなり
牛の屠りたる日し[illegible]なる牛[illegible]して[illegible]
フラーウヤコテ[illegible]ハ脂を絞り[illegible]し咽をさし通すなり

一 牛乳を平常多く用ひ食料に和し食にハ(乳を毛口[illegible]とて砂糖醋酪あり[illegible])
(ホートルといふ即ち酪なりしかして[illegible]とものを)法製して賣買ス牛乳汁
(カースといふ乳餅なり菓子及食となす)
をとるに先牡牛の乳に犢をつけ乳を出し吸出させて後乳を搾し
御売りおけ人に毎年の乳をさうふ其をつけ後り出し桶へ
酒え是を久しく[illegible]ハ[illegible]又乳汁より[illegible]是
まく料理に用ゆ是をコスウ[illegible]といふ
ヤコテノフラーウ[illegible]といふて乳を[illegible]むし[illegible]ひ[illegible]

ことの名なりトンゴスハ麻の訛なりと云よし

一 カホーレンといふ菓子あり（長崎にて此菓子をコウリーといふ 都にてコールハ和蘭菓子の名をいふ和蘭の一種 を長崎にて菓子のかの菓と名をまかへり 又都にてコーリイと思ふものあり といふや俗称のホタレナレヤロンラナ）是を用ゆるに刻して
麦粉を以て拌せ塩をくる入大様に油揚にし破味を生ス
是等の大概によりて余は是を塩にて肝へさる品なり
し 牛肉の汁物にて蕃人食する牛の類を以て二種あれハ汁物
焼ハ一盃あと入かきまぜし肉を入蕃人羅もを入羅を賞翫す
入蒸焼にし蕃人和して煮出しけりて肉を添へて麦餅よ
添へて食する（塩のくひ付物ありてくろうあり）蒸餅を日本のめし汁物ハ
味噌汁を添へて食すとおなじ 極麩り汁菜まて佗すゝる

如きのことときのことの食く日本の味噌を用ゆる如しより牛肉ハ蕃人
毎日の食料也但し精進日ハ牛肉并一切獣足の肉おもむ
唯魚類の肉野菜の類を食す用ゆるなり（羊の類ハ蕃人か多く食すると云ともまれなり）
精進潔斎といふときは獣足の肉を抜き食すると魚類ハ活
魚ともとより梅魚類は蕃人ても蒸焼にしても冷食にもあり
ハ魚を小麦の粉にくるし蒸焼にして食すなれは
料魚の汁にても其外に鰯魚川魚ハ其国にあるへき魚類鮒魚有
サーモーリ（如何鮭ハ）といふ鮭より渡る カモリ（鮭ハカトといふ）といふ
魚ハ アルス（如何の類か）といふ魚ハ オレヤテルナ（全く鱶なり）といふ大魚の類
食料とあれハ塩蔵物（レホツケ）ありて乾魚なとも朝夕是をヨーナ云

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677382

抽籤の説を詳す

一 雞鴨鷲鷲の類を畜養して食料とし家に飼養せしに百羽
何れは百羽の雛をそこなうて殺すもの殺し殺すを殺し慎し
殺さるゝ精を用ふ千羽あひ生ずる雛鳥とも未だ
あれてまゝ生長して千用足るに百羽はいつても百羽をて羽を
負さるゝ事なりしたるゆえ大家には種々の鳥類も百羽も飼
て何りインシイカユーレツ といふ鳥を拵つとむて上食とし 横ヶ丁ラ ソンウ印
鶏雉と呼ぶ鳥家に何ぞされは畜ひまゝ人は用ひもとめなり
いかゝの鳥家にても雛は十羽あとゞし畜ひ生ぬり

一 鳥類の抽籤にしてもち甲乙ゆへ高貴人ものも抽籤にしてまゝ

一 粉にしたるゆへ殺し粥にたきて牛乳油をさして煮食ふ
麻仁角松實の油何りしは油は精進の日にもふ

一 慎は山慎殺り味海慎にかゝるゝ殺し周囲なりより出すとき

一 精菜にて牛乳にのを加へ粥に糖にて牛乳油をさして喜食
の時あと鶏その殺りふ出す山見に右のむとく繋し鶏肉をくへ
食すもの也何り

菜は志ひけにて南無雲利要の地方より来るものなり精菜
にて交易は此地にて二合ゆへ殺すて洞海の技殺し 是彼浪を攻撃
菜粒油かして風味も悪し

一 菜蔬は細くして經し風味日本にさしてかゝれ生まて

そきに塩をふり底に沙をさし精を用ゆ胡荽菊（ニンジン）黄
て食ふ茎青は形象く色黄しまて食るて可也

一 乾生姜と焼き蓋椒は唐山よりの交易物にて何り此地のへて
蓋椒を好く食ふ解毒のものありといへり唐より焼角まじ
し第一人事なり菜も唐の菜をもち甲胡椒もこ甲見えれ
何方より来る事知れず

一 コーヒイ」といふこの何り其の実のよし焼（ソラマメ）豆のもきこものへ
ムスクワ」の形の方より実に来る俵人にして何り市店にて商
とすれば黒く炒ク粗末にして布袋に入れ袋を置くうけ
袋の口より熱湯を漬き出し湯に牛乳をさしてのむまく

鶏卵砂糖を入れ出しても飲取り出しまして朝夕の
見をのこし振香の時宮にも出し併る出さくみたりに吉ず
右中ゆるに上の人而已用ゆるへ

梅ふ和菓コーホ」といふ別に澤泥五

一 ヤーホルキ」といふ多き芋何り蔬菜人色肌好く芋に似たり
梅ふ和菓いふアルト。アウフ」あるうを其種子を蔬生
につくへて吾邦にも蔬生の物とも果してヤホルキ」
ありや吾ヤを知れず

これを掘りいせて乾し細末さくるものをヤーホルキ」粉ムツ
辺といふ此芋粉碗可得に小麦粉二升ならへ入製して

菓子と称す物なり

古典風俗にて改製の白粉をふりかけるを粉は別じとの之風俗の説

一 酒は悪しくて麦穰酒之事にて作る他の事なるものも有り

他国はハランソースケ アンケリ等より来る上酒も有り 極る上葡萄酒ハ酒なるべし

メラヒセライ とて酒食を販人て往来無所有り其国は法国

の酒酒称に有り

一 毒を酒にアンミナすく酒 とて毒を物なり事を用ひ又魚蟲

を漬貯へて其形相せざる酒をシヘリ といふなり

一 煙草出地を産ぬ別に煙草たく角ふより来る 酒をくさくさ事ハ此国

の人多くは喫烟せぬ男俗なり上人まれし一二段ぐしあるさ

このむよふ事之ヤユーヲレフラトツケレ ハ云ふて好き吸之本国の

如きは絶て喫煙する物なし

一 嘆煙草といふ物なり是煙草を粗末にして篤人を出れて

嘆く出さて嘆く之是も女人は用ひすく如し老婦なと

出さまのためとて如きて滑をまれ滑を流し居る志なり

揚ふ嘆煙草のこの葉張を洋す

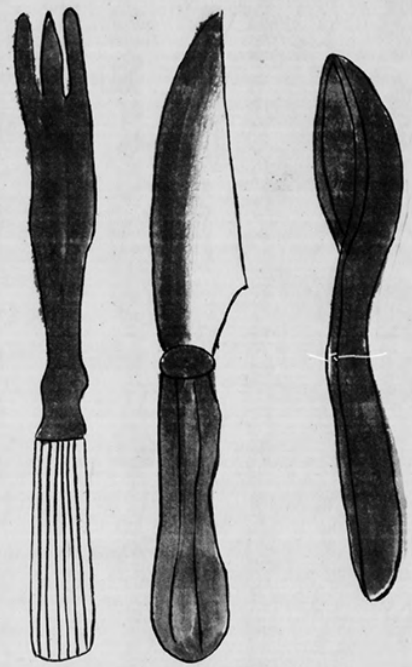
一 舩海を常とするものはうなぎ煙草を薫腹すこれを

ワ口 といふ病を遊る為なりといふ ワ口 病のこの別を起す

一 食事の仕事には皆結婚集話を張せる事も記せるなく

平日とても食盤を居く 形は口角多盤 長角又五ヶ之見

食盤之道具之器



肢飾 第三

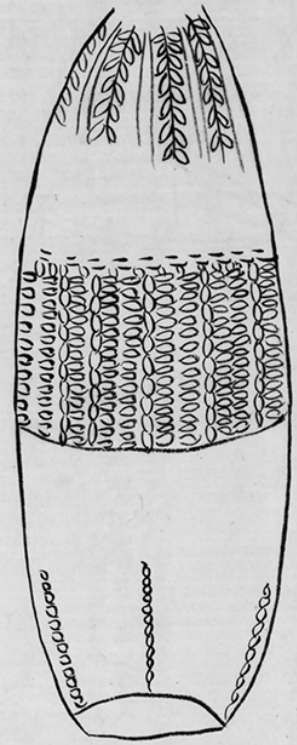
衣服ハ宮殿の等ニ早ちよりて禁ニ整り物ることと中ニ申来洋
あるものを仰す（支那の形ニ大略を取す）平人ハ衣服の物漂客来滞留中彼
地ニ用ひて此度持来れるものもしく易物せるの間の
如し其中彼国ニ殉し無ものも其ことて其名のこれ絵ハ
其持来れるものハ其用と其物と易用ニ清出するもの
其易なきものハ占フポ力といふ殆人のもまくこの何り彼袋之
毛を用ひて志る上志之通鄙の詞ニハ是をこらバ」と
いふセリトー力」変用る単衣なりもの人なと志用ハハライ

カリハーカ

メリヤス頭巾

メリヤスノ如クアミメルモノ

此帽子其者の時ハ男女とも冠之帰る時も冠る
故ニ和葉ニハ スウフミユウ[ワ]トハ ふ腰帽子の
義なり



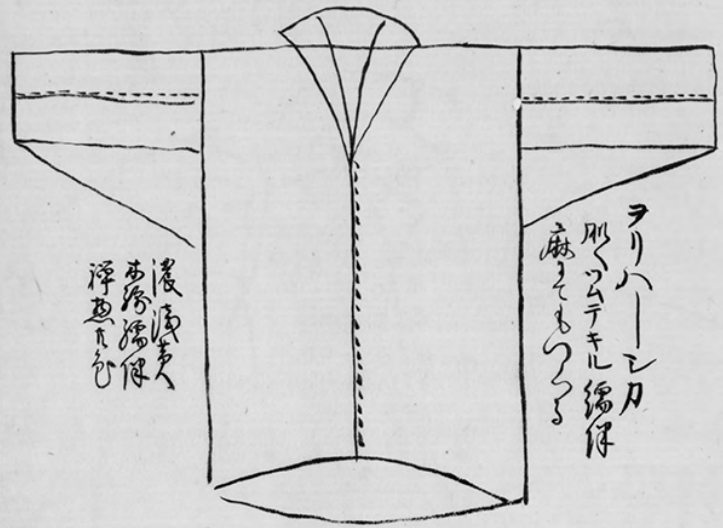
ヲリハーシカ

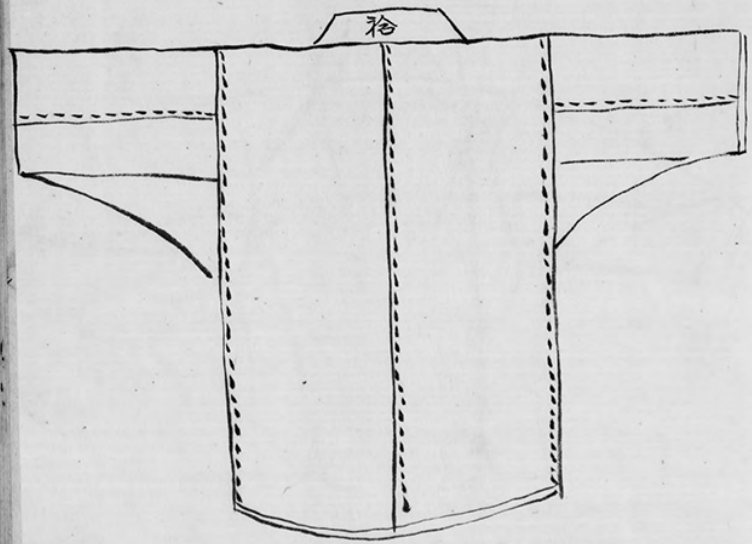
別くツムテキル編保
麻まてもつくる

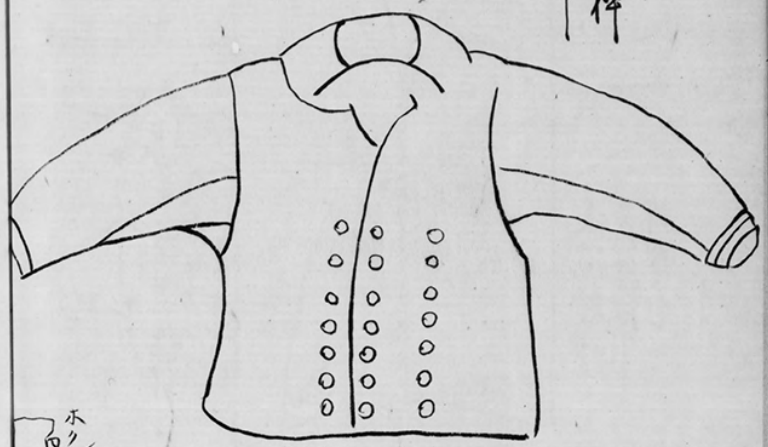
浅漬黄
赤縁編保
浮惠丸包

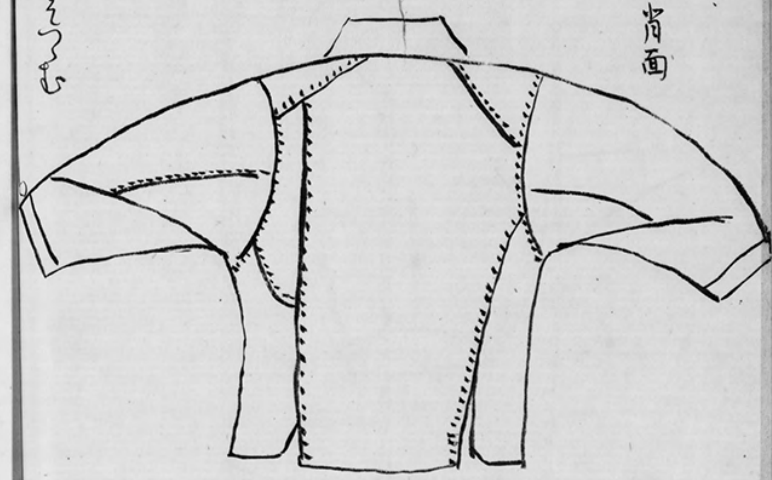
裕

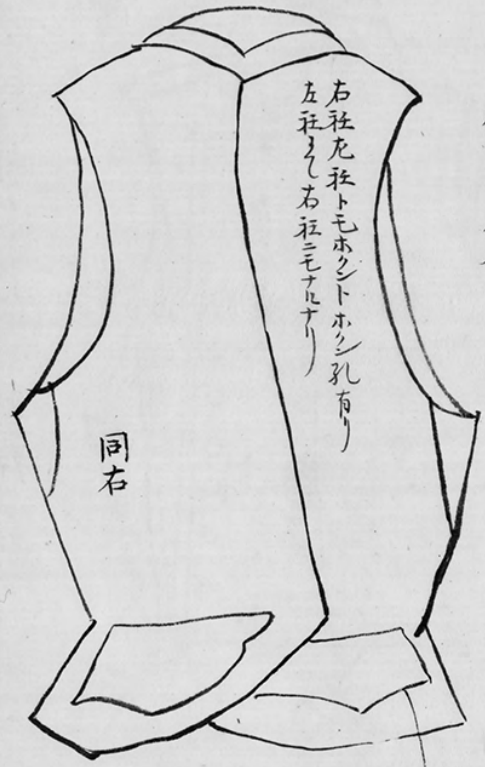
東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677382



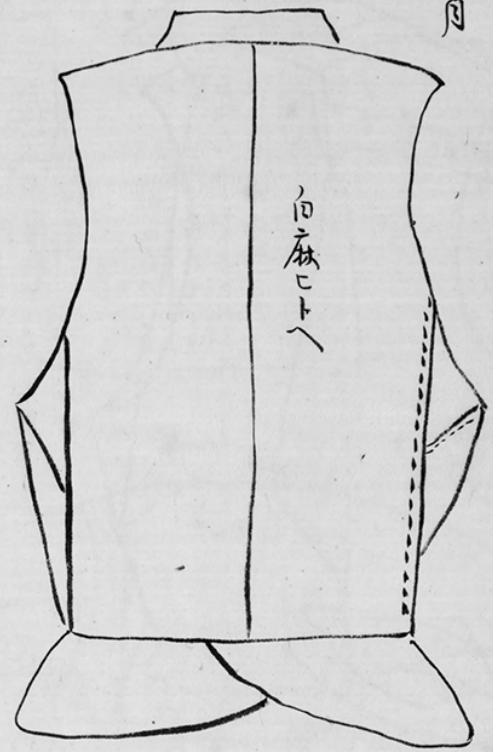






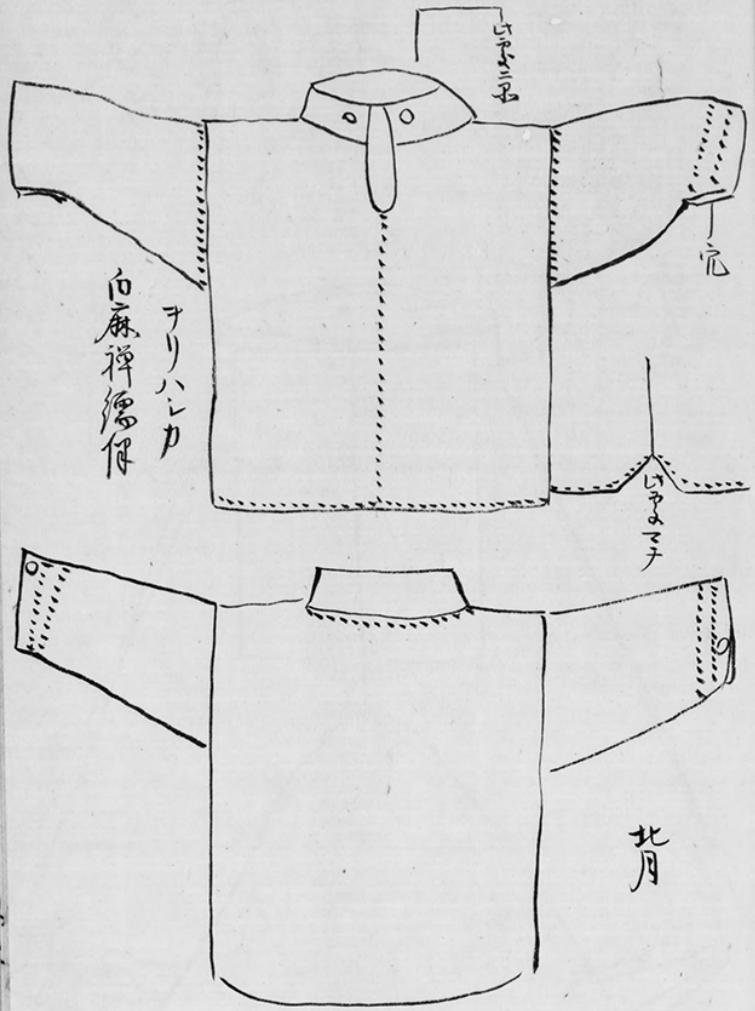


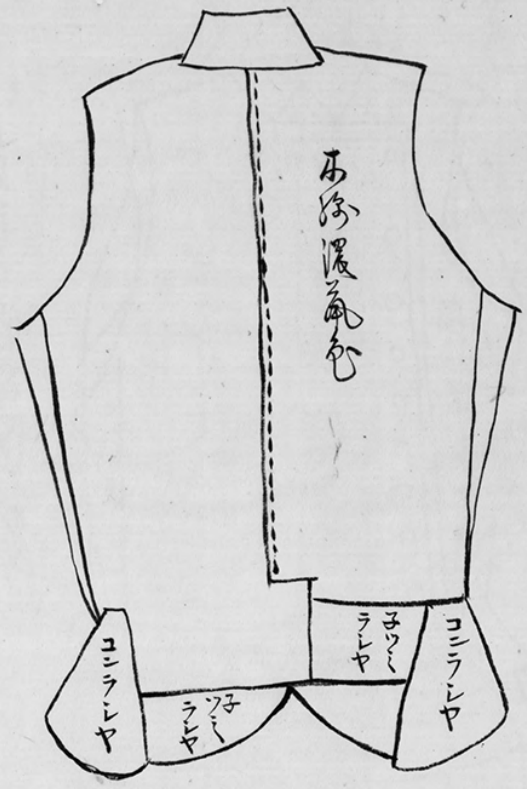
肖



ガミゾ

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677382





東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677382

シタノイ

紋織本絲投り

徳裳白もめん

ホタニトモキレニテツヽム

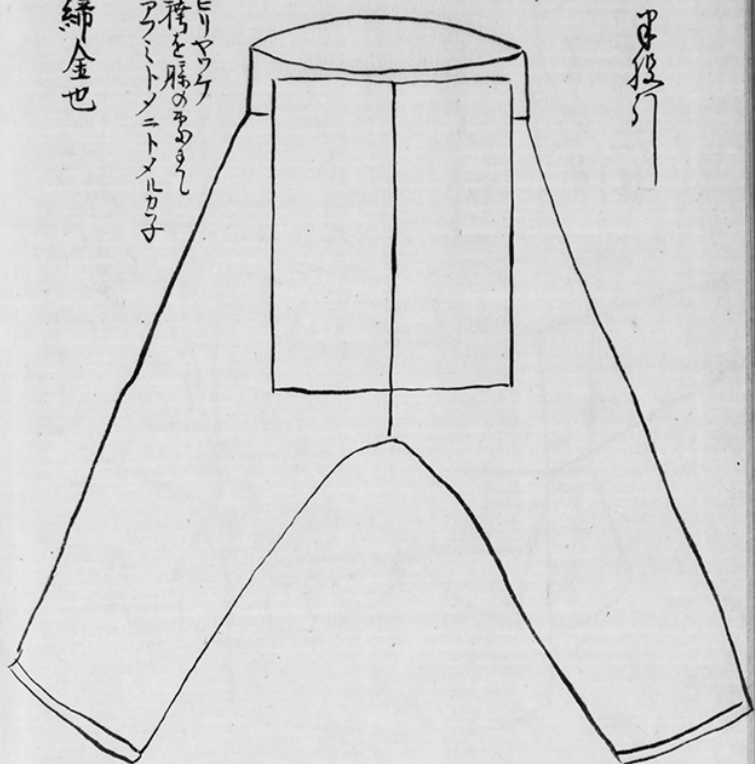
ヒラスケレミワ

ヒリヤウケ

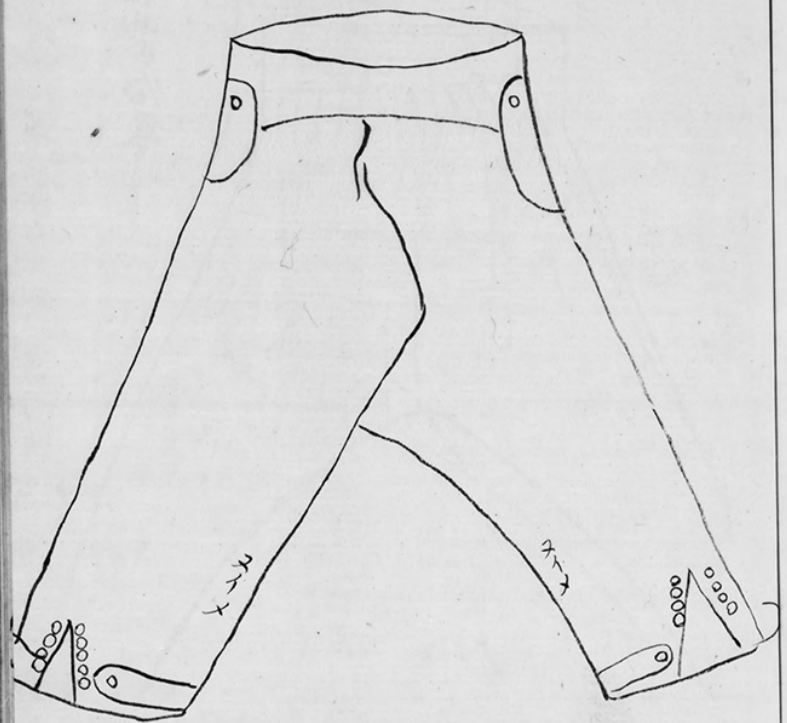
袴を膝のあるまで

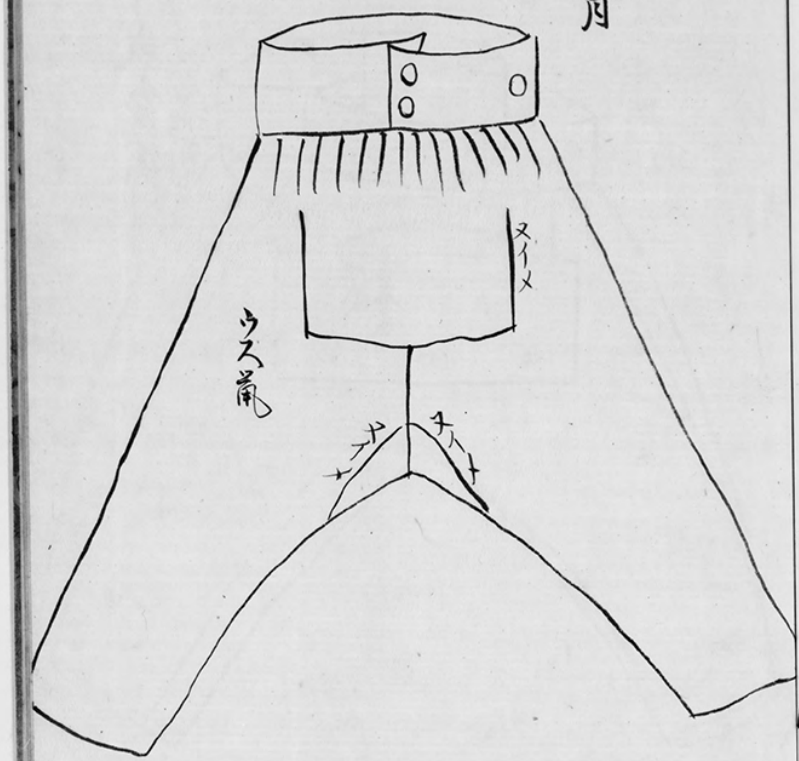
アラミトメニトメルカ子

締金也

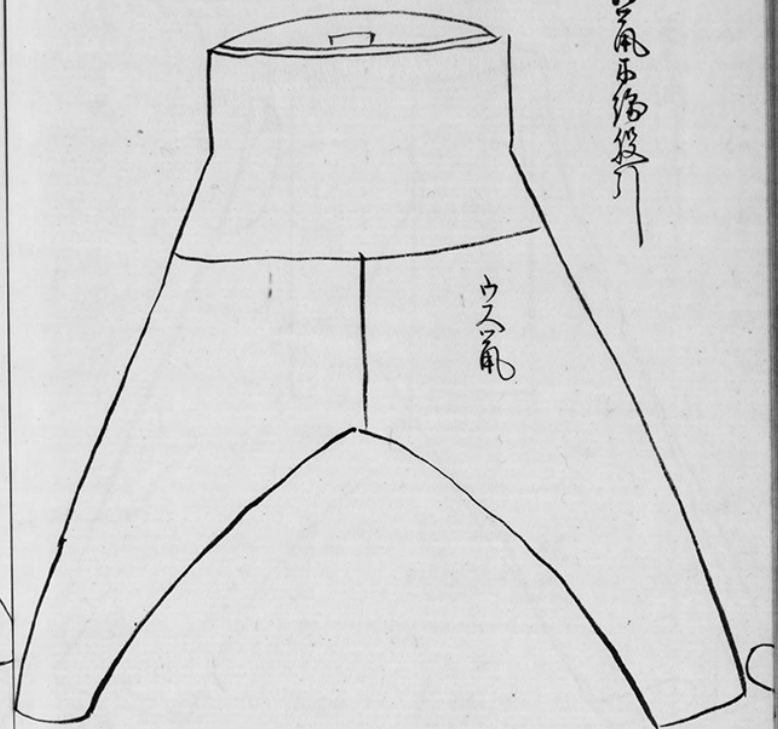


北月



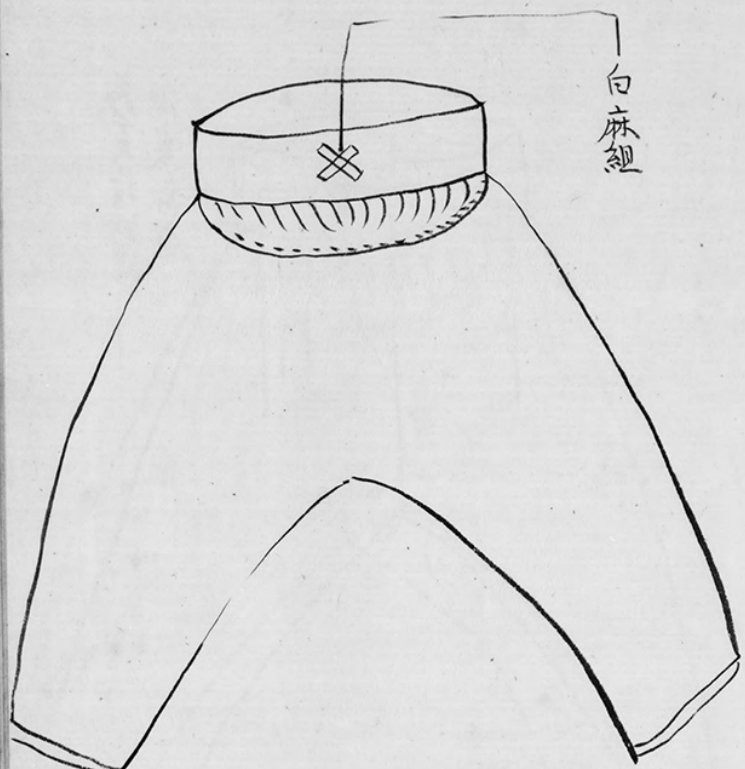


背

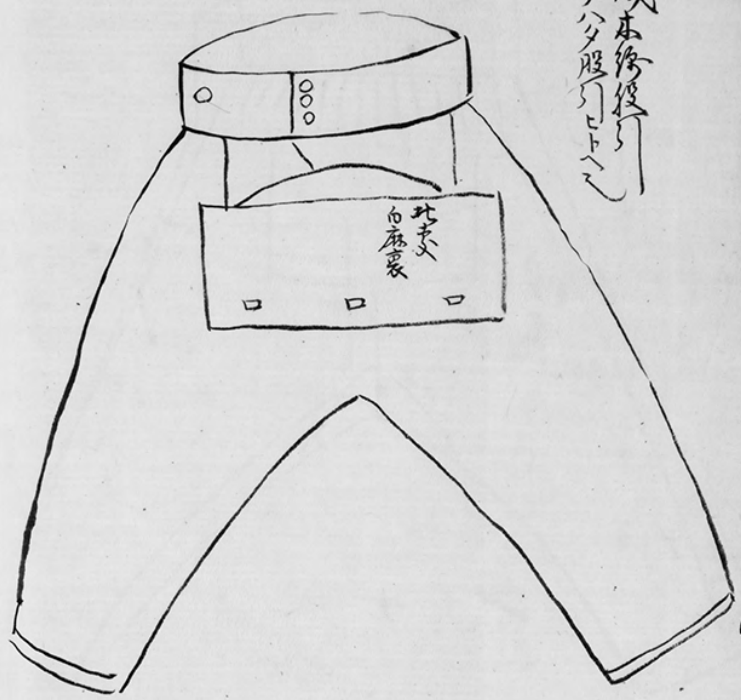


ヒダノイ

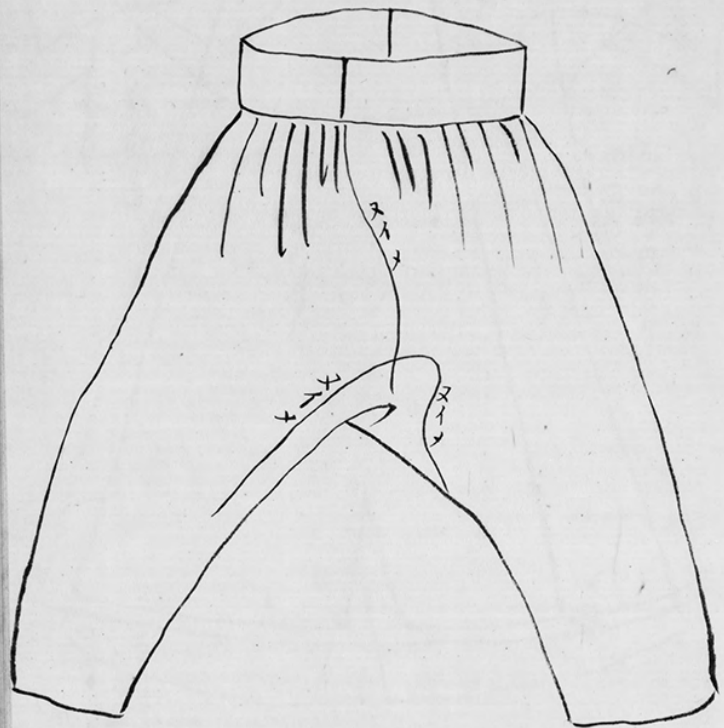
東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677382

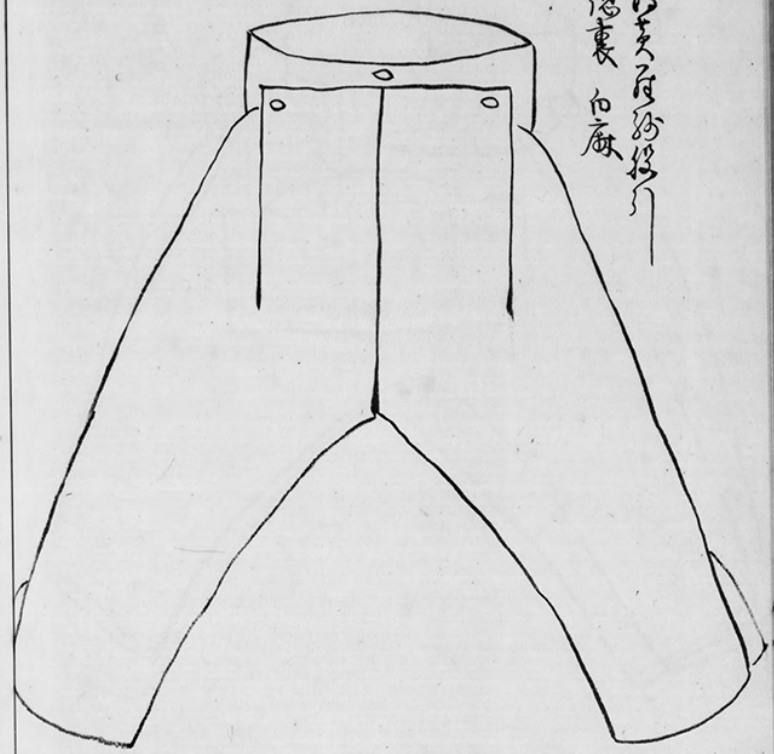


背月



肩



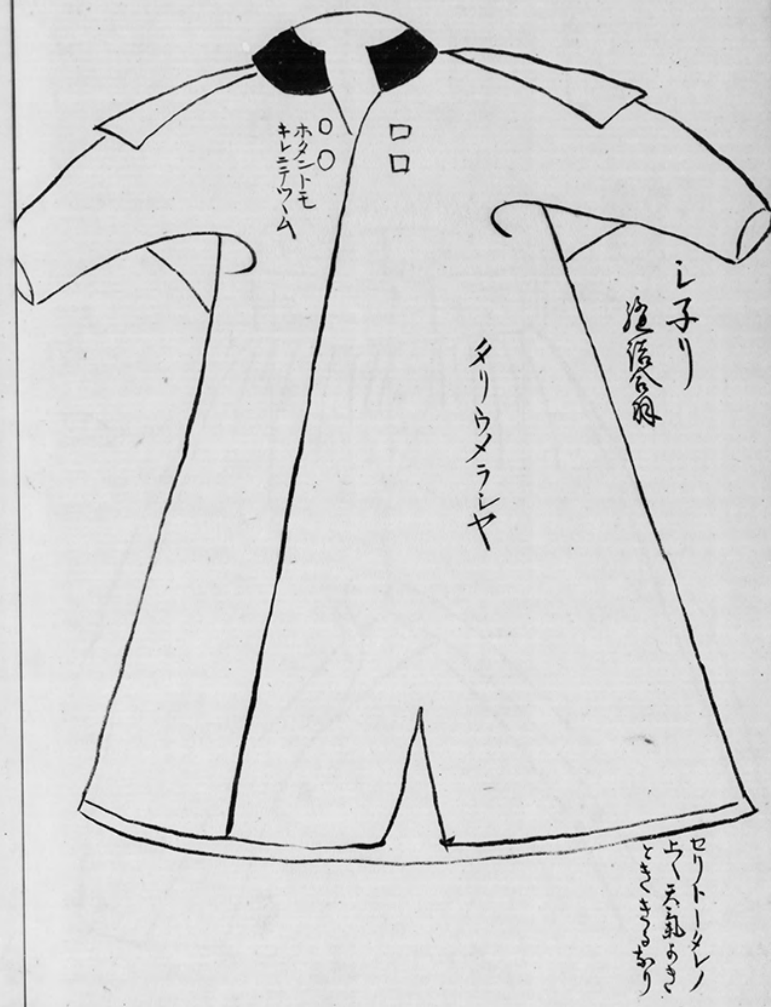


襠裏 白麻

レタノイ

ホタン左右
ツレヤリ

此ホタンニワトモニ
トモキレテワ〻ム



東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677382

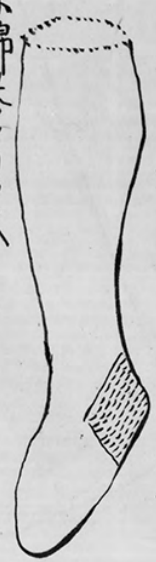
レ子リ

紋羅紋
詰合羽

背

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677382

チヨロケ



白木綿足ノメリヤス

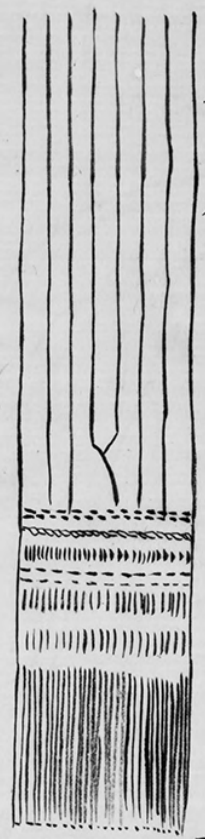
チユルケイメリヤス組ニシテ足ヨリヒザ迄ハメルモノ之其上ニハ草ニテ造リタル戴サハタトイフモノヲハメル

シヤーカ

茶色木綿帯

田舎ニテセリトーメヲ差タル上ハ

ヒメヲトリタヽム



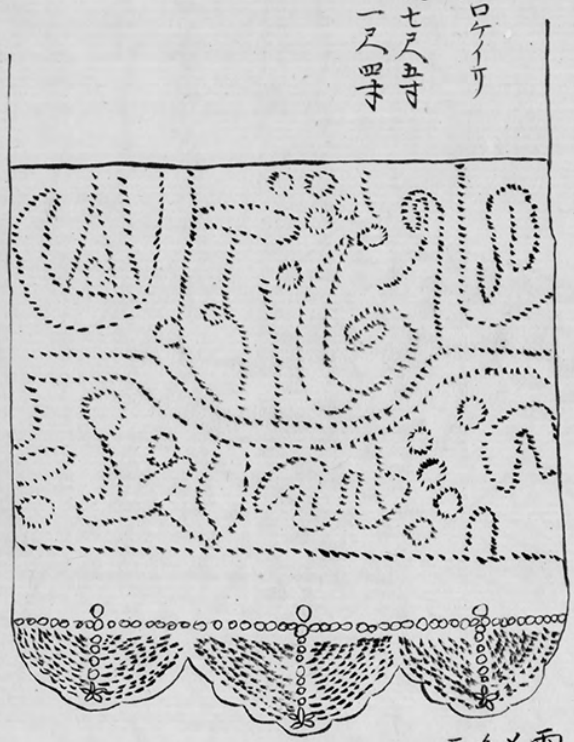
両ハシニ如斯カサリアリ

フサトモニ一尺一尺六寸五ア

ホロケンツサ

白麻手抜

モノカケヲキテヲフク也



ホロケイサ

長七尺五寸

巾一尺四寸

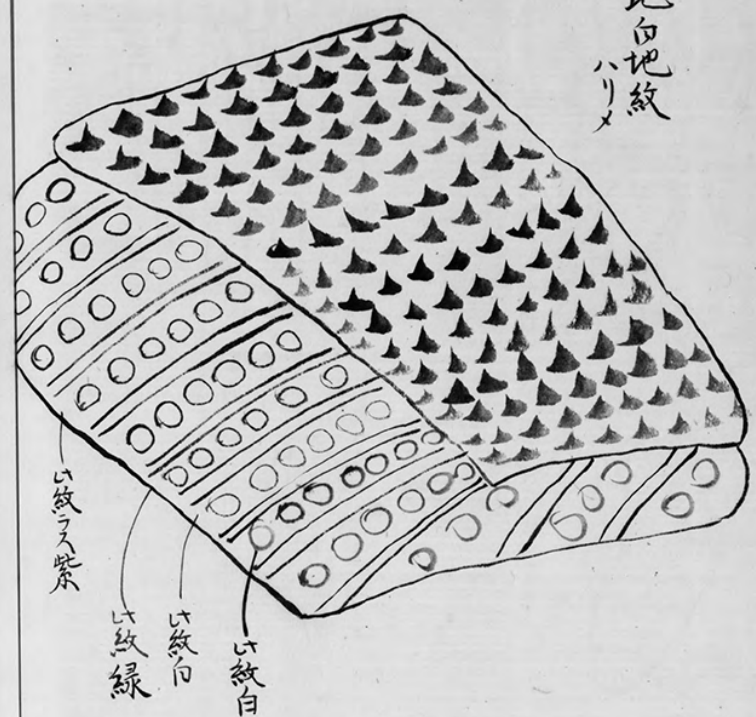
両端如此ガザリメリヤスノユトキ糸ニテクミタルモノナリ

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677382

ヲチセアテノ
サラサ蒲團

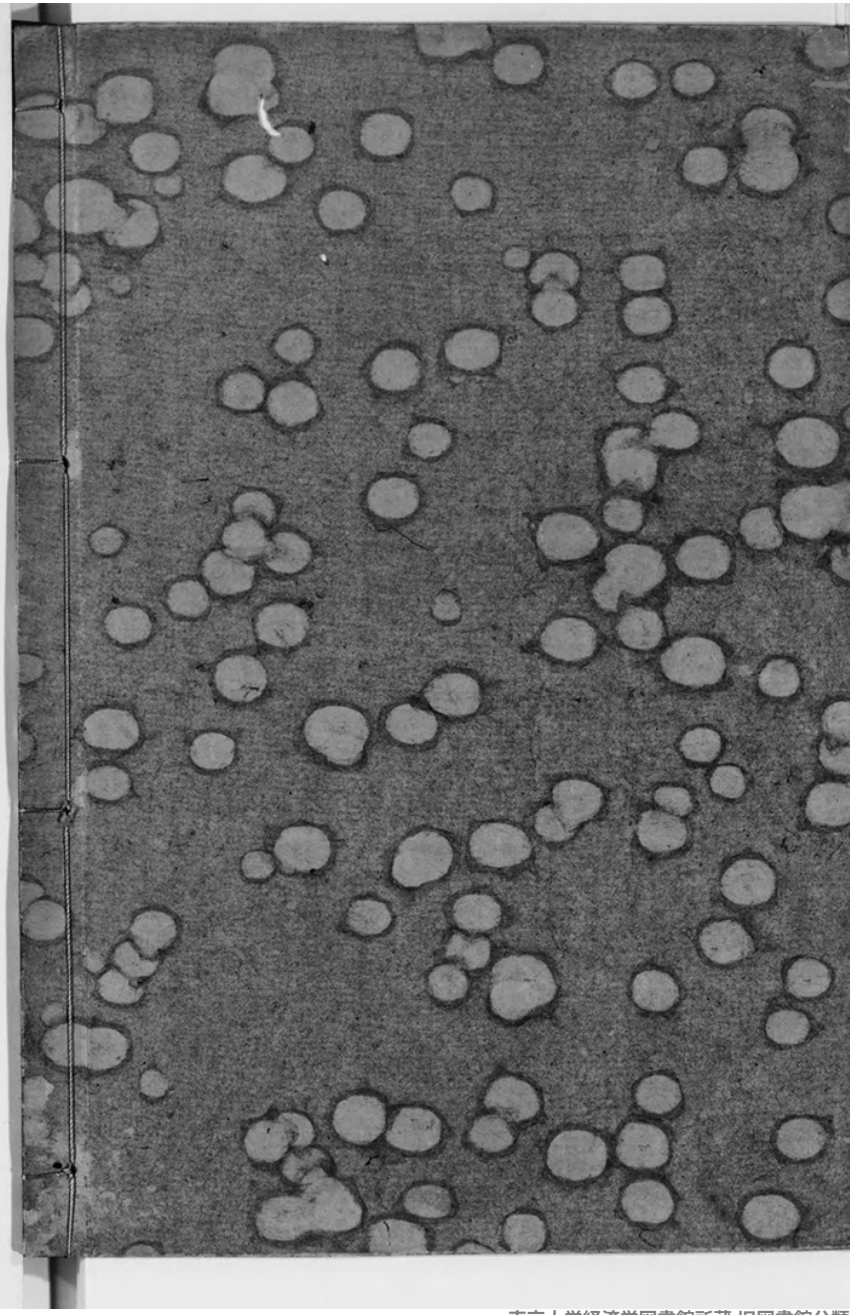
裏麻ノ
ユトキモノ

地白地紋
ハリメ



まて毒むいろしなりズウイヅ区ハ脇の方の方につく此「スウイ
ヅ区」ハ平位にすめハまより賜るを用ゆるんまく賞もとめて用る
もなり官爵ニ於りてスウイヅ区をかりなる人なりレン区
計用る人ハ相位いやしくても王の身をしつとむる人ハ五位る
ことも常くを得るハ出ぬ人なり 諸侯の子孫の場所の前つ
王もレサノヅ区のもとへ往しに官人毎くいと毎先にあるを
見しに皆スウイヅ区の服をきたり法役人両面しレサ
ノヅ区長路の役所へ出し時用ひしスウイヅ区の新服
肩にかけたるレン区も国王より賜る所なりとす中
衣服の制度を用しまゝのあるべきにれども酒家

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677382



東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677382